



## 感染症予防と地域交流の両立を目指して

教頭 仲山 智



今年度は新型コロナウイルスの感染拡大、ワクチン接種、感染の沈静化、そしてオミクロン株の流行とコロナウィルスの感染状況がめまぐるしく変化した1年でした。多くの教育現場で感染防止を考えながら、いかに教育活動の充実を図るかという難題に取り組んだ1年でもあります。本校においても、地域交流、地域の人材活用など人的交流を活発に行ってきた平成を振り返り、令和の交流のあり方を考えさせられる1年であったように感じます。そんな中であって居住地校交流をお引き受けいただき、児童生徒が充実した時間を過ごせたことはひとえにご協力をいただいた小学校、中学校の児童生徒のみならずそして先生方のおかげだと感謝しております。また、障害理解授業を実施した際には本校職員の話に多くの児童、生徒のみならず真剣な態度で耳を傾けてくれたと聞いております。ミニセミナー「こみっと」においても、多くの先生方がお集まりくださり、特別支援教育に対する高い関心を示していただきました。誠にありがとうございました。

さて、人的交流の方法、地域交流のあり方はコロナウィルスの変化やワクチン、経口薬など状況の変化に応じて、ICTを活用するなど変化していくと思われませんが、その根本にある「相手を理解したい」「誰かの支えになりたい」という気持ちには変化はないものと信じ、変わってほしくないと願っております。全ての子どもが個々の特性にあった支援を受けられる環境づくりのため、今後も本校の活動にご理解とご協力を、改めてお願いいたします。



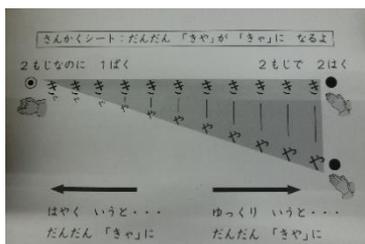
## 地域の学校の取組紹介

今年度、本校職員が訪問要請を請けて拝見した小学校通級指導教室の自立活動の指導をご紹介します。

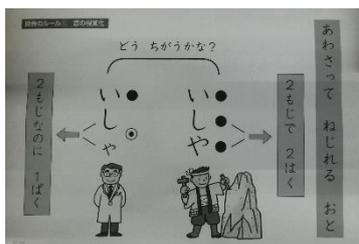
授業は「拗音、促音、長音、拗長音の読み」に課題のある児童への指導でした。児童の特性を踏まえて、授業の導入部分ではビジョントレーニングを行い、ウォーミングアップ。展開部分では、多層指導モデルMIMを活用し、音を視覚化、動作化して提示するなど、五感を活用した学習活動でした。また、プリント学習では、カードを並べたり、正しい方や言葉に合う絵カードを選択したりするなど出題パターンを変えながら、テンポよく学習が進んでいきました。苦手なことにアプローチした学習内容でしたが、児童は最後まで意欲的に取り組む姿が印象的でした。

### 【教材紹介】

☆拗音、促音、長音、拗長音の読み  
〈ルール of 明確化〉



〈音の視覚化〉



〈音の動作化〉



《参考》多層指導モデルMIM 読みのアセスメント・指導パッケージ  
つまずきのある読みを流暢な読みへ

国立特別支援教育総合研究所 海津 亜希子編著  
Gakken より

## 教えて!専門監 最終号

## 支援は、少なくとも多くても 子どもは困る

教育専門監 小笠原英紀



訪問先の学校等での支援会議や研修会で、子どもの特性に応じた支援方策を考え合うのですが、中には、学校（園）での配慮が手厚すぎると、家庭生活や社会生活では、他者に頼ってしまい、自分の力で解決できずに、かえって困るのではないかと、自立を妨げるのではないかとという疑問の声があります。

自分で解決できる力、解決しようとする気持ちを育てることは確かに必要ですし、子ども自身が「自分にはその力がある」と思えるようになってほしいと思います。学校での特別な支援は、そのための働きかけだと考えてもいいと思います。「自立のための支援」です。

学びにくさがあって「授業が分からない、だからつまらない、だからやりたくない、だから授業に参加しない、寝ている」という高校生の正直な言葉を聞いたことがあります。

この高校生に、努力を強いることではこの状況を解決できそうにありません。学びやすくする個別的な配慮が必要です。自分で解決できるようにヒントを与える、やり方を提案する、取り組みやすいワークシートを準備する、ICTを活用する、問題文を読んで聞かせる、別室を準備するなどの個別的な配慮によって、生徒が自分でやり遂げられ、その後の同様の課題では、自分なりの方法でがんばれるようになり、支援の必要がなくなった、というふうになっていたらいいな、と思います。その積み重ねで、以前はいろいろな場面で支援が必要だったのに、今は自分の力で解決しようとしている、という姿を増やしたいものです。

個別的な配慮は、子どもの特性を考慮し、困っている状況に応じて、その子どもに「必要な程度」の見極めが必要です。よけいな世話、あるいは甘やかしにならない程度の働きかけが大切です。必要な個別的な配慮がないと子どもを困らせてしまいますが、育てたい思いが強すぎて、懸命に言い聞かせて、注意して、怒って、教える働きかけは、かえって子どもを苦しめることがあります。その「必要な程度」というのは、子どもによって異なる、ということもご注意ください。子どもに合わせて「ほどよく」です。いずれにしても徐々に、少なくして、できるだけ少ない支援で、適応できていけるようになってほしいと思います。

支援者は、子どもの味方であり続けたいと思います。そうすれば、子どもとの関係性が良好になり、子どもとやり取りするうちに、支援の程度も方策も適切になるでしょう。



## 障害理解授業 ～令和4年度もご活用ください～

今年度は、小学校2校、高等学校1校で障害理解授業を行いました。子どもたちは、パラリンピックやドラマ、多様性社会などで障害に関する情報に触れる機会が増えてきています。小・中学校等では総合的な学習の時間や道徳等で、福祉や障害を取り上げる学校もあるようです。

能代支援学校で行っている障害理解授業では「自分たちの地域に障害のある人が暮らしていることを知る」を目標の一つとしています。能代支援学校の紹介や体験的な活動等を通して、障害について得た知識を身近な生活と結びつけて考える機会になると考えます。令和4年度も、能代支援学校の障害理解授業をご活用ください。



☆今年度もセンター的機能のたくさんのご活用、ありがとうございました☆

教頭：仲山智 教育専門監：小笠原英紀 地域支援部主任：船山真生  
TEL 0185-55-0691 FAX 0185-55-0681  
ホームページ <https://noshiroshien.ed.jp>  
E-mail [noshiro-s@akita-pref.ed.jp](mailto:noshiro-s@akita-pref.ed.jp)